

農業と科学

1986
6

CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO. LTD

与作V1号を利用した イチゴのポット育苗

神奈川県病害虫防除所
所長代理

竹下 純 則*

はじめに

イチゴの促成栽培では確実な花芽分化促進の技術が重要である。このため高冷地育苗や短日処理による花芽分化促進が行なわれているが、近年チッソ栄養コントロールできるポット育苗が技術的に安定した育苗法として各地で普及している。

神奈川県秦野市でも昭和60年からポット育苗の導入がはじまり、生産組合員65人のうち半数近い30人がポット育苗を導入して60年度は著しい成果が得られた(表-1参照)。

当地のポット育苗は液肥の追肥でなく、全量を元肥に施す方法で、従来のポット育苗と若干ことなるのでそれらを中心に紹介する。

秦野市のイチゴは、芳玉種を用い、12月～6月まで長い期間にわたり収穫されるが、高い収益が得られるのは業務用として需要の多い12月であり、この時期に如何に多くの果実を出荷できるかによって収入に著しい差が現われる。したがって12月の出荷を目標にして現在「ブランチ」という断根操作でチッソ栄養の吸収を抑制しているが、この場合にはすぐに肥料を吸収し、また株間のパラッキも大きいので確実なチッソを切る方法と言えない。

そこでポット育苗を導入することにした。当初、液肥の追肥で育苗するように考えたが、5,000株～10,000株のポットに均一に追肥することは大変だと思われたので、肥料はすべて元肥に均一に施用し、後はかん水だけを行えばよいように設計した。

1. 育苗資材と施肥設計

床土の良否が苗の作柄に影響することは言うまでもないことである。良い床土とは、水はけがよく、水もちの

良いことである。このことは全く相反することであるが団粒化した土ならばその条件が満される。

イチゴの育苗では株数が多いので10,000本の苗を育苗するには8立方メートルの床土を必要とし、全部が均一な資材でないとい画一的な管理指導も行ないにくいので当生産組合では相模粒土(浄水場の沈澱汚泥に凝集剤を加え加熱乾燥させた粒状の土)を用い、保水性と保肥力を良くするため、与作V1号を混合することにした。つまり、相模粒土は人工的に粒状化しているが、保水性が小さいので夏の育苗時における鉢内の乾燥を防止するため、経済性等も考慮して床土量の15%を与作V1号で補った。また、育苗鉢も充実した苗を作るため、4号鉢を用い肥料は1株あたりのチッソ量が200mgとなるように、与作V1号の成分も施肥設計の計算に入れ、緩効性肥料(CDU化成、又はIB化成)で補った。なお、相模粒土の矯正のため過磷酸石灰を土の量の0.1%加え、これらの成分を合計すると1鉢当り成分は、チッソ200mg、リンサン480mg、カリ180mgとなる。

(1) 10,000株当りの必要な資材

1. 相模粒土 6,000ℓ(6立方メートル)

本号の内容

§ 与作V1号を利用した

イチゴのポット育苗……………(1)

神奈川県病害虫防除所

所長代理 竹下純則

§ 森林の国土保全機能(Ⅱ)……………(4)

—森林の土保全機能に関する研究の動向—

農林水産省林業試験場 陶山正憲
防災部治山第二研究室長

* 元神奈川県伊勢原農業改良普及所

表一 年次別の5,000株あたりの12月の出荷箱数

年次	収 量	収穫はじめ	12月29日までの出荷箱数
昭和57年普通育苗		12月9日	491箱
昭和58年普通育苗		12月12日	646箱
昭和59年普通育苗		12月21日	87箱
昭和60年	普通育苗	12月15日	416箱(100)
	ポット育苗	12月4日	1377箱(331)

(秦野市、片野和彦氏の記録より)

※ 収穫はじめは年次によりまちまちであり、普通育苗では12月9日が最も早いが、ポット育苗では12月4日から収穫でき、60年は普通育苗に比較して11日早く、12月の収量も普通育苗の3倍以上を示した。すなわち、ポット育苗は収穫が早まるばかりでなく株の揃いがよく、収量も増加する。

表二 ポット育苗の作業暦

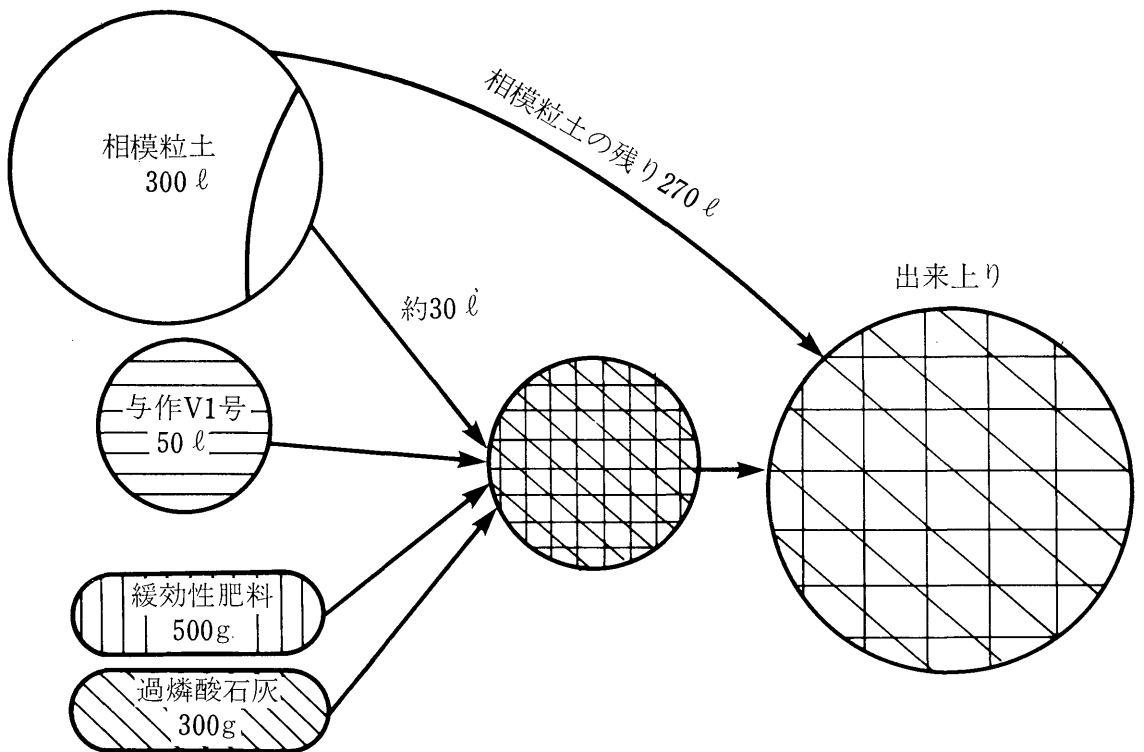
苗の鉢上げ		花芽分化促進操作		花芽分化期		開花始め		収穫始め	
6月28日	7月5日	8月10日	8月15日	9月10日	9月15日	10月20日	10月25日	11月25日	12月1日

- ビニール被覆は出蕾の直前に行わない保温に努める。
- 10月5日頃までにマルチする。
- 分化後五日くらいの間定植。
- かん水も十分に行なう。
- 分化が確認されたら、液肥の追肥。
- 花芽分化の確認。
- 8月下旬〜9月上旬までは寒冷紗被覆する。
- 苗の老化防止のため葉かき作業はつづける。
- かん水を控え目にして樹液濃度を高める。
- 葉色が黄化し、葉柄が赤くなる。
- チツツを切り畝比を高める。
- 株の直径1cm以上重さ25g以上の苗を作る。
- 生育を揃える。
- かん水管理と葉かき作業(苗の老化防止)
- 株を大きく充実させる(株間を十分にとる)
- 活着したら寒冷紗を除去する。
- 発根直前から初期の苗を鉢受けしてもよい。
- 寒冷紗で被覆し、十分にかん水する。
- 葉数2〜3枚で発根した仔苗をえらぶ。

2. 与作V1号 1,000 l (22袋)
3. 緩効性肥料 10 kg (CDU化成, 又は IB化成, 15-15-15)
4. 過磷酸石灰 6 kg
5. 4号鉢 10,000ヶ (黒色, 丸型ポリ鉢)

(2) 床土作成の手順 (1回に500鉢を作る場合)

※当初、相模粒土約30 lと与作V1号50 l、緩効肥料500g、過磷酸石灰300gを混合し、この混合物と残りの相模粒土270 lを加え充分に混合し、鉢に入れたら鉢は必ずシートの上に並べ充分にかん水しておく。



2. 育苗の設計

芽玉種は花芽分化後出蕾開花までに9~10月の気温で約40日を要し、開花から収穫まで11月の気温で約35日を要する。つまり、収穫期の75日前に花芽分化を終らせるように設計する。例えば12月1日に初収穫するためには9月15日頃に分化させればよい。このためには8月中旬頃にチッソが切れるようにして、8月10日以降は絶対にチッソ肥料を効かしてはいけない。

花芽分化の準備を行なう時期(8月10日頃)まで充実

した苗を育てるには40日以上育成期間が必要なため、7月5日頃までに鉢上げする。花芽分化期を揃えるため、鉢上げの期間も短かくし、6月28日~7月5日頃までの短い期間に仔苗を揃え、苗を鉢上げした後は寒冷紗などで被覆して1回に多量にかん水するよりは回数で水量を補い活着を促進させる。

なお参考までにポット育苗の作業暦を示すと表一2のようになる。